

グリーンウッドワークを通して考える 樹木の系統と生態

岐阜県立森林文化アカデミー 准教授 ● 玉木 一郎



紹介したいと思います。

【低木は硬い?】

例えば、低木には割と硬い材のものが多くのように思います。具体的にはマルバハギやトウコマツナギといったマメ科の低木や、アオキ、ノリウツギ、クスノキ科のクロモジ属はとても硬い材を持っています。マメ科はもともとハリエンジュのように硬いものもありますが、ネムノキのように軟らかい樹種もあります。一方、マルバハギやトウコマツナギはハリエンジュと比べても、かなりの硬さです。低木は高木に比べて、枝と幹の太さの差が小さく、その結果高木に比べ、枝に対して幹が相対的に細くなるため、材の強度が大きいのかもしれません。



写真1 トウコマツナギ(左)とノリウツギ(中央)、ヤマコバシ(右)

【ヤマハゼとヤマウルシの違い】

ウルシ属は黄色い心材を持つという特徴があります。私の生活圏ではヤマハゼとヤマウルシが多く、いずれも黄色い心材とクリーム色の辺材が対象的でとても美しいため、これら2種の材は何度も削りました。



写真2 ヤマウルシ(左)とヤマハゼ(右)

【複葉の木は道管が大きい?】

先述のウルシ属や近縁のヌルデ、モクセイ科のトネリコ属、マメ科、センダン、シンジュ、タラノキはいずれも複葉で、大きな道管が目立つ材をしています。複葉の樹種は明るい環境を好むものが多く、そのような樹種は水をたくさん吸い上げてぐんぐん成長するので、道管が大きいのかもしれないと考えました。面白いのは、ムクロジ科はカエデ属のように細かい道管の散孔材が多いのですが、複葉のムクロジは大きめの道管が目立つ環孔材をしています(かといってムクロジが明るいところを好んでは、その成長もそれほど良いようには思えません)。ただし、例外もいくつかあり、ムクロジ科のトチノキやミカン科のサンショウ属は複葉でも小さな道管をしています。これらの樹種では、複葉であるということよりも系統の制約の方が強く影響しているのかもしれません。



写真3 カキノキ(左)とレモン(右)

【果樹は緻密な材】
果樹は緻密な材(適度な硬さの散孔材)でカトラリーに向いていると言われますが、果樹でひとまとめにするよりは、果樹として用いられる樹種の系統の特徴で考えたほうが適切のように思います。果樹というと、主にはミカン科やバラ科の樹種、カキノキになり、これらはいずれも適度な硬さの散孔材のため、果樹に緻密な材ということになっているのだと思います(カキノキは道管が大きめだが、その割に緻密)。

今回は、これまでに木を削りながら漠然と考えていたことや、同僚の植物生態学の柳沢先生や木工の久津輪先生と話していたことを文字にする良い機会となりました。もちろん、納得していただけのこと、ただけないこともあるかと思えます。私はメジャからマイナまで様々な樹種の材を削っていますので、同好の士の方が森林文化アカデミーにいらした際には、ぜひともこれらの違いについて語り合いたいです。

2019年に本学で開催された「さじフェス2019」がきっかけで、グリーンウッドワーク、特にスプーンカービングにはまり、それ以来ほぼ毎日、斧やナイフで木を削る生活が続いています。製作したスプーンの数は500本を、削ったことのある樹種数は140を超えました。これまでは、立ち木の同定はできて木材の同定はできなかつたのですが、流石に普段から様々な樹種の材に触れていると、樹種差や個体差もだんだん分かるようになってきました。はずかしながら私が学生の頃は、柱目と板目の違いを何度聞いても理解できないレベルでしたが、今では「好きこそものの上手なれ」という言葉を実感しています。

私の専門は森林生態学や森林遺伝学です。もう少し噛み砕いて説明すると、樹木がどのように進化してきたか、どのように自然の中で生活しているのかを明らかにすることです。ですので、木を削っているときには、系統(科や属)や生態と、木目や材の色、硬さなどをついっい関連付けて考えてしまいます。基本的には系統の制約があるのですが(進化的に近いものにはそもそも共通する部分があるという)、それを超えて生態が似たものには、共通する性質があるように思えます。ここからの話は、何かしらのデータに基づく科学的なものではなく、私の経験に基づく話で大変恐縮ですが、これまでに気付いたことをいくつか